

集団や社会とよりよく関わろうとする子どもの育成

—V L F : Voices of Love and Freedom (思いやり育成プログラム) を活用した単元的道徳学習の工夫—

建部 拓

弘前大学教育学部附属小学校

【キーワード】 V L F 単元的道徳学習 よりよく関わろうとする 学級満足度

1 はじめに

集団の中での人間関係が上手く築けない子が学校現場で見られるようになってきている。これは、他人に意識を向け、気持ちを押し量る力が弱いのではないかと思われる。そこで自分を大事に思うと同時に他の人たちも大事であるという意識のもとに、他の人たちとよりよい関わりを持てるような子どもを育てていく道徳の授業を工夫したいと考え、本主題を設定した。

附属小学校道徳部では、単元的道徳学習の研究を進めている。これは道徳の時間においても複数主題を単元的に取り扱うことにより、道徳の授業を多様に展開できるという利点がある。そのためさまざまな指導法を取り込む幅を持っている。そこで単元的道徳学習の授業に、V L F をもとにした授業を取り入れることにより、より効果的に他の人とよりよい関わりを持てるような力を伸ばしていけると考えた。

V L F (Voices of Love and Freedom) について

V L F (Voices of Love and Freedom) はロバート L. セルマンが開発し、渡辺弥生が日本の道徳教育に合うよう改変し「思いやり育成プログラム」として取り入れることを提唱した教育方法である。役割取得能力の発達段階をベースにして、子どもがどのようにして自分や他の人の気持ち、立場を推測できるようになるか、子ども個々の発達をクラスという集団の力動を利用して育む。

ステップ1 〈結びつき〉	教師が個人的な体験を子どもに話す。 語る者と語られる者の信頼関係を築く。
ステップ2 〈話し合い〉	物語を読み、対人関係の葛藤状況で立ち止まり、その状況での登場人物の気持ちや立場を推測させる。(パートナーインタビュー)
ステップ3 〈実践〉	ロールプレイによって、さまざまな視点を体験させ、立場が異なると考え方や気持ちも異なることに気づかせる。 (ペア活動・葛藤のエスカレーター・問題解決のABC)
ステップ4 〈表現〉	自分の心に内在化した思いを表現させる。 (日記・手紙・物語の続き)

1)

2 研究の方法

単元的道徳学習の道徳の時間にV L Fを活用した授業を設定し実践する。そして実践前と実践後に、学級内の関係がよりよいものになっているかどうか、児童の心理をQ-U「学級満足尺度」や「自己肯定度インベントリー」によって調査し、その結果からV L Fを活用した単元的道徳学習の有効性を考察する。

3 授業の実践

3-1 単元的道徳学習の実践

	「認める心」	
自分と他者との違いや関わりについての気づき	人それぞれの考え方や立場、在り方などを受け止め、肯定的に関わっていかうとする気持ちを持つ。	道徳的实践
事前の活動	道徳の時間	事後の活動
体育 ・なわ跳び (二人跳び) ・トラストアップ	第3次 VLFの授業 「ぼくと友達と学級と」4-(3) 「ぼくの一票」学研, 「ぼくはこうかいしない」教育同人社より改作	体育 ・ドッジボール (セルフジャッジ)
学級活動 ・エンカウンター 「わたしってだれ？」	↑ 第2次 VLFの授業 「すれちがい」2-(4) 学研	国語 ・今, わたしは, ぼくは ・「失敗」をめぐって
	↑ 第1次 「すばらしい力」1-(6) 学研	学級活動 ・学級文集作り

3-2 VLFの授業実践

VLFの授業は、第2次と第3次に行い、VLFの4つのステップはそのまま生かしつつ、本来一つの授業を4時間で行うところ2時間に短縮して行った。

第1次	一時間目	導入<結びつき> 教師の友だちとのすれちがいの経験を話した。 展開<話し合い> 資料を読み、資料中のよし子とえり子の視点にそれぞれ立ち、すれちがいによって生じた二人の気持ちについて考えた。(パートナーインタビュー)
	二時間目	<実践> 遅れて着いたえり子に対し横を向いて返事もしないよし子、この後の二人の行動を考えロールプレイした。代表のペアが行った後、隣同士でロールプレイを行った。 終末<表現> この後、二人の関係がどう修復されていったのか、話の続きを考えた。
第2次	一時間目	導入<結びつき> 教師の経験を話した。 展開<話し合い> 資料を読み、三郎が葛藤している場面で一度止め、なぜ迷っているのか、どんな行動をとったらよいのか考えた。まずパートナーインタビューにより意見交流をし、次に全体で話し合った。
	二時間目	<実践> 資料の続きを読み、三郎がどう行動したかを確認した。その後学級会の場面、帰りの場面をロールプレイで再現した。三郎と正夫をそれぞれ1人ずつ、学級の子たちをあとの14人で担当して行った。正夫が三郎を呼び止めた後の部分は、すべてアドリブでおこなった。 終末<表現> 三郎または正夫にあてて手紙を書くことによって自分の思いを表現した。

4 結果と考察

4-1 「学級満足度尺度」²⁾の結果から

表1：学級満足度尺度の結果

	学級生活満足群	侵害行為認知群	非承認群	学級生活不満足群
実践前	56.3%	12.5%	18.7%	12.5%
実践後	68.7%	12.5%	6.3%	12.5%
全国平均	37%	17%	21%	25%

この調査から、表1のような結果が得られた。実践後は、学級生活満足群が増加した。また、この表だけでは、不満足群の児童は、いまだにそのままであるかのようである。しかし、児童全体の分布からは実践後の変化がよりはっきりしてくる。

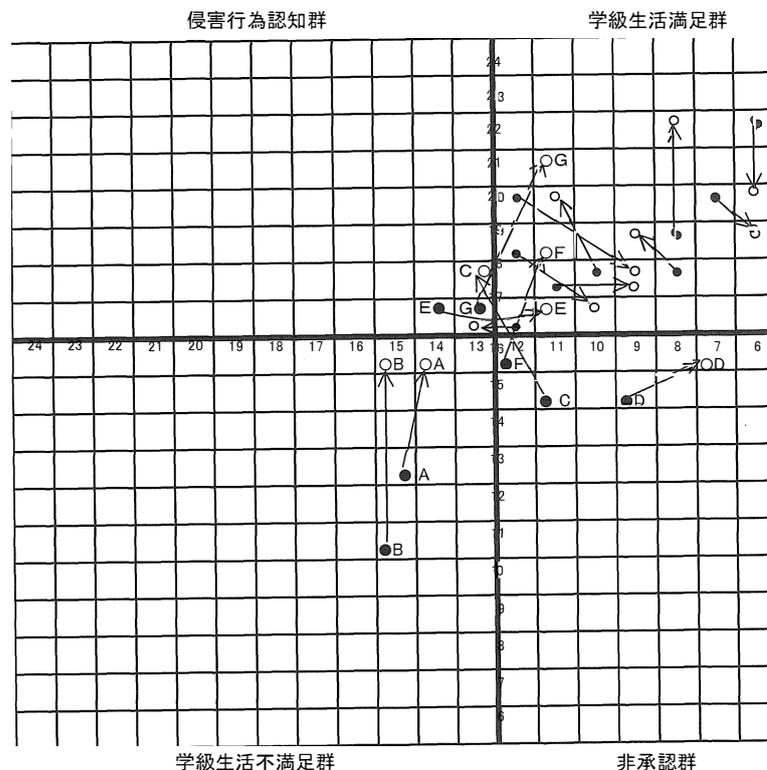


図1：児童の分布状況

図1の分布の様子を見ると、不満足群にいるA児、B児が、授業実践後には、共に境界線付近まで移動しているのが分かる。不満足群からはまだ出てはいないものの、学級の人間関係の関わりがよい方向にかわっている様子がうかがえる。また非承認群にいたC児、D児も満足群までは入らないものの、同じく境界線付近まで移動しており、学級での関係がよい方向に向かっていることが分かる。E児、F児、G児は、もともと境界線付近にいたのが満足群に入ることができている。

このように見ると、学級の中で不安感を抱いていたり、学級の集団の中でまだうまく関わっていなかったりする子どもたちにとっては、このVLFを活用した単元的道徳学習によって、学級集団と関わる上である程度の効果が現れていることが分かる。

4-2 「自己肯定度インベントリー」の結果から

学級生活不満足群にある児童について見ると、実践前のA児、B児の自己肯定度は、図2の細線の通りであったのに対し、実践後は太線の部分のように自己肯定度

は高くなるどころか低くなる項目も出てきた。

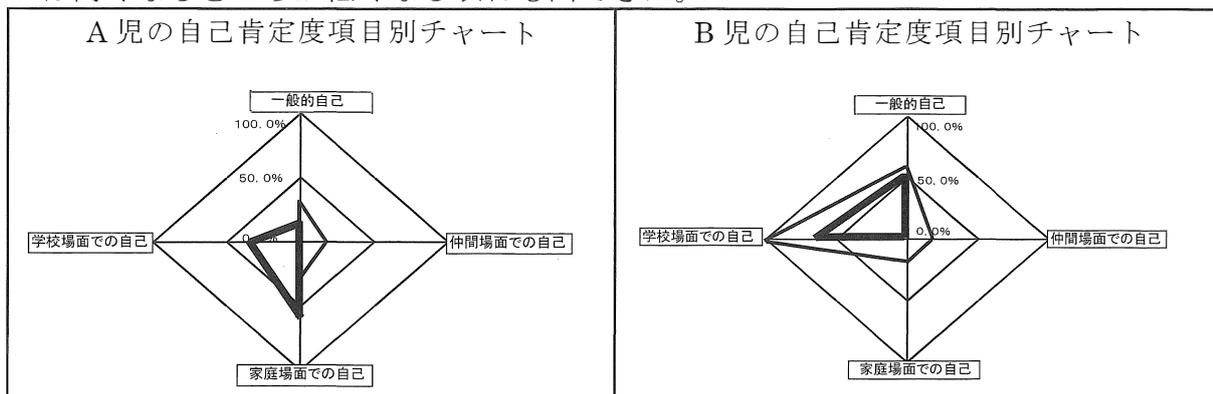


図2：自己肯定感インベントリー³⁾の結果

このことから推測されるのは、本授業実践を通し、学級集団全体の中での関係は良くなったものの、個人の自尊感情を高めるまで影響力が及んでいないと考えられる。また、学級内の関係がよい方向に向かい、よりよい関わりが持てる子が増えつつある中で、かえって自分のいたらなさが見えてきたためとも考えられる。

自己概念は、他者との比較を通じて自己のさまざまな側面を評価し、形成される⁴⁾こともあるため、他者と比べて自分を低く評価してしまう部分も出てくることが考えられる。また社会的相互作用の中で、しだいに結晶化された役割を持ち、それが概念化されて自己像が形成される。こうした自己像は、かなり固定し比較的永続的である⁵⁾という。A児、B児も他者との関わりの中で固定してきた自己概念があり、本実践だけでは、そこまで影響を与えることができなかつたと考えられる。

5 おわりに

5-1 成果

本研究の結果、VLFを活用した単元的道徳学習を実践することによって、学級集団の中でよりよい関わりを持てるような子を育成することは可能であった。特に、学級に不満足感を持っている児童において効果が大きく見られた。

5-2 課題

集団をより大きな範囲へと広げていき、その中でもよりよい関わりを持てる子を育成していくためには、自尊感情が大切である。自己概念や自尊感情は、他者に対してどのような行動をとるか、他者とどのような関係をむすぶかなど、対人関係に大きな影響を与える⁴⁾からである。しかしこの自尊感情を育てていくためには、本実践だけでは不十分である。この実践をさらに長期間継続して取り組んだり、短期間でも効果が得られる新たな方策を開発したりすることが必要である。

引用文献

- 1) 渡辺弥生：「VLFによる思いやり育成プログラム」図書文化社 p. 3, pp. 39-40. 2001
- 2) 河村茂雄他企画編集：「Q-Uによる学級経営スーパーバイズ・ガイド」図書文化社 p. 56 2004
- 3) 伊東博：「ニュー・カウンセリング」誠信書房 pp. 193-201. 1983
- 4) 高木修監修・土田昭司編：「対人行動の社会心理学」北大路書房 p. 9 2001
- 5) 古籴安好：「集団心理学」共立出版 pp. 56-57. 1973